

国際会議参加報告

第37回国際軍事史学会大会の概要

花田 智之

2011（平成23）年度の軍事史国際会議は8月29日（月）から9月2日（金）にかけてブラジル連邦共和国リオデジャネイロ市にある、陸軍指揮幕僚大学で開催された。同会議は今回で37回目となり、会議には36か国から約160名が参加した。参加者は主に各国軍の軍事史研究機関に所属する研究者や、大学・民間研究機関に所属する軍事史研究者などで、日本からは小官のほか、高橋久志・上智大学教授（日本軍事史学会会長）と、稲葉千晴・名城大学教授が参加した。アジアからは、中国から寿暁松少将・人民解放軍軍事科学院戦略研究部長ほか5名、韓国から崔北鎮・国防軍史編纂研究所長ほか1名、インドネシアから2名が参加した（順不同）。

本会議の共通テーマは「植民地の独立：18世紀から現在までの植民地・独立戦争」であり、29のセッションが設定され、計87本の論文が提出・発表された。公用語は英語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語であった。

参加者の発表は全般として、帝国主義とナショナリズムに関する理論研究や、南米及びアジア・アフリカ諸国の植民地独立（戦争）などの実証研究における軍事史的側面を分析した幅広い発表がなされた。特にブラジル開催ということで南米（植民地）史に力点を置いた発表も数多く見られ、活発な質疑応答がなされた。

本会議はブラジル軍事史学会が事務局となり、ブラジル連邦軍の全面的な支援のもとで開催された。会議のみならず、コパカバーナ要塞への史跡研修、レセプションを含めて申し分のない運営が行われ、また開会式へのセルソ・アモリン国防大臣の出席など、ブラジル国防省・連邦軍の軍事史研究に対する支持と熱意がうかがわれた。

来年（2012年）の第38回軍事史国際会議は8月下旬に、ブルガリア共和国ソフィア市で開催される予定である。共通テーマは「戦争とテクノロジー」である。

（防衛研究所戦史研究センター戦史研究室教官）